

関西社会福祉学会ニュースレター

2006年度2号

巻頭言

東京福祉大学 研究科長・学部長
平山 尚

「米国における社会福祉理論と研究の状況」というテーマで 2007 年度の本学会の 3 月 4 日の年次大会で基調講演を行うことになりました。巻頭言をお借りして講演の内容について少しご説明いたします。過去 30 年間に米国の社会福祉専門職は団体組織、人材、知識、技術、研究面などで量と質とともに多大な発展をとげました。現在のソーシャルワーカーの活動範囲は、「地域開発」「政治ソーシャルワーク」から「グループワーク」「臨床ソーシャルワーク」まで広範囲であり、多様であります。まさに、1915 年に A. フレックスナーが当時のソーシャルワークの「多様性、広域性」を批判したことに対するの逆手をとる形で発展してきたと言えると思います。現存の理論も研究も広範囲にわたり多様であります。しかし、この講演では、私自身の専門領域である臨床ソーシャルワークを中心に理論と研究についてお話しいたします。現存の実践理論の動向を理解するうえでいくつかの分類方法があると思われる。その一例として実践理論をその基礎となる哲学・前提思考を考慮し、「Modern」と「Post-modern」、または、「Soft」と「Hard」というように分けて考えることが可能でしょう。精神分析理論対社会構成主義、または、精神分析理論・社会構成主義対認知・行動理論などの分類方法も考えられます。例えば、最近のグループワークの動向をみると、「相互援助」「エンパワーメント」を基本とし社会変革を目指す「伝統派」と、よりテクニカルな面を強調し明確で具体的な目標の達成を主眼においている「近代派」が共存する形をとっています。しかし、両者の間に理論闘争が起こっているのではなく、互いの立場を尊重し理解しながらグループワーク理論と実践の発展を目指しています。

現在、無視することが出来ない、しかも、急速に力量を増し注目を集めている Evidence-Based Practice (EBP) が存在します。EBP の中核にあるのが研究・調査であり、エビデンスとは科学的方法によって検証された「知識、技術」を実践に適用することを意味しています。介入の効果を調査する場合に観察、または、測定可能な概念、理論の選択ということになりますとどうしても認知・行動理論の方が精神分析理論、さら

には、社会構成主義に基づく実践方法よりも優位に位置づけられているということになります。特に、最も多量なエビデンスが存在するのが精神保健分野であると言えます。例えば、統合失調症、うつ病、アルコール依存症、PTSD などの診断と治療には多大な効果があると立証された知識・技術が存在します。しかも、この分野は多種類の専門職によって構成されるチーム・アプローチが確立されています。多量なエビデンスを創造している研究の背後には、長年にわたる NIMH (国立精神衛生研究所) によるソーシャルワークを始め、精神医学、臨床心理学、社会学などへの莫大な研究資金援助という実績があります。以上のような内容の講演を予定していますから是非年次大会へご参加ください。

2006年度関西社会福祉学会年次大会・ 日本社会福祉学会関西西部会総会案内

来る 2007 年 3 月 4 日 (日) に、龍谷大学大宮学舎において、2006 年度の「関西社会福祉学会」の年次大会、及び「日本社会福祉学会」関西西部会の総会が行われます。

今回の大会では、「ソーシャルワーク理論の動向と課題」をテーマに、ソーシャルワークがどのような理論基盤を発展させてきたか、また現在どのような概念枠組みを展開しているのか、また日本におけるソーシャルワーク理論の今後の課題が何であるのかなどについて、平山尚先生の基調講演とシンポジウムを中心に議論を深めていきたいと考えています。

現代社会においては常に新たな福祉課題が生起し、新しい福祉思想が展開されています。また、社会の変化に伴い制度の改変が進み、ソーシャルワークも大きな変化を余儀なくされます。この様な状況であればこそ、ソーシャルワークの基盤となる理論を丁寧に検証し、実践的なソーシャルワーク理論を構築する必要があると考えられます。今大会がその検証の一つの機会になればと考えています。会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。(担当校代表：山辺朗子)

1. 日 時 2007 年 3 月 4 日 (日) 9 : 30 ~ 19 : 15
2. 会 場 龍谷大学大宮学舎 (京都市下京区)
3. プログラム
受 付 9 : 30 ~
口頭発表 10 : 30 ~ 12 : 30
休 憩 12 : 30 ~ 13 : 30

総会 13:30～14:15
基調講演 14:20～15:30
シンポジウム 15:40～17:30
懇親会 17:45～19:15

4. 基調講演およびシンポジウム

基調講演 「ソーシャルワーク理論の動向と課題」
平山 尚 (東京福祉大学)
シンポジウム「ソーシャルワーク理論の動向と課題」
シンポジスト 川田誉音 (龍谷大学)
狭間香代子 (関西大学)
山辺朗子 (龍谷大学)
コメンテータ 平山 尚
コーディネータ 小山 隆 (同志社大学)

5. 参加費 無料 (懇親会別途)

6. 問い合わせ先

〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5
龍谷大学 社会学部 山辺朗子
E-mail: yamabe@soc.ryukoku.ac.jp

7. 懇親会のご案内

年次大会の終了後、龍谷大学大宮学舎内にて懇親会を開催します (会費は3,000円、院生は1,500円)。会員相互の研究交流や情報交換の場として、有益な時間にししたいと思いますので、ふるってご参加下さいますようお願いいたします。

8. 大会・懇親会申し込み

「関西社会福祉学会参加、懇親会参加申し込み」と明記し、お名前、ご所属、連絡先をお書きの上、メールもしくはファックス、郵送等で申し込んでください。

同封の申込書をご利用いただいても結構です。

懇親会費は当日受付にてお払ください。
大会・懇親会ともに当日参加も歓迎いたします。
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5
龍谷大学 社会学部 山辺朗子
E-mail: yamabe@soc.ryukoku.ac.jp
Fax: 077-544-7229 (龍谷大学社会学部現場実習指導室 気付)

(山辺朗子)

自由研究発表の募集

1. 申し込みの締め切りについて

2007年2月19日(月)までに下記の松端まで郵送もしくはメールにて、自由研究発表要旨を送付(送信)してください。なお、発表する方は、事前にメールにて、1月31日(水)までに、氏名、所属、主題について、松端までご連絡ください。

2. 自由研究発表要旨と資料について

今大会の自由研究の発表要旨は、全国大会の要領に準じて、以下のようにいたします。

(1) 用紙サイズ・枚数

1 発表につきA4版1ページの横書き

(2) 余白

上下左右25mm(目安)

(3) フォント

主題-12ポイントゴシック

副題-10.5ポイントゴシック

所属-9ポイント明朝 氏名-10ポイント明朝

会員番号-9ポイント明朝

キーワード-9ポイント明朝

※以上を用紙の上側に罫線で囲んで記載してください。

見出し-10ポイントゴシック

本文9ポイント明朝 1行48～50字程度

(4) 自由研究発表要旨と資料について

提出いただいた自由研究発表要旨は、当日の大会・総会資料と一緒に綴じ込み配布いたします。

また、当日配布資料については、各自印刷の上、50部を持参してください。

3. 宛先

郵送の場合 〒594-1198 和泉市まなび野1-1
桃山学院大学 社会学部 松端克文
電話: 0725-54-3131 (代)

E-mailの場合 katufumi@andrew.ac.jp

(松端克文)

第9回 若手研究者・院生情報交換会案内

テーマ: 「社会福祉諸分野の研究 manner—若手研究者・院生世代に近い3人とざっくばらんに語り合う—」

発題者: 阪口春彦 (龍谷大学短期大学部)

「ソーシャルワーク論と福祉教育論の研究マナー」

鎮目真人 (同志社女子大学)

「社会福祉政策論の研究マナー」

岡田直人 (大阪大谷大学)

「社会福祉分野論 (高齢者福祉) の研究マナー」

内 容：「発題者3人が、それぞれの研究分野からこれまでに取り組んだ研究や経験を振り返って、研究の仕方、作法、研究に対する態度などについてざっくりと参加者と語り合おうというものです」

日 時：2007年2月4日（日）14：00～17：00

会 場：龍谷大学 深草学舎2号館106教室
（京都市伏見区深草塚本町67）

参加費：無料

懇親会：17：30～「夢庵アーバンホテル京都店」にて
（一人3,000円程度）

参加申し込み：準備の都合上、事前に岡田までメールかファックスにて申し込んでください。

E-mail：okadan@osaka-ohtani.ac.jp

Fax：0721（24）1046

「岡田直人宛『第9回若手研究者・院生情報交換会参加申込』と明記し、①氏名、②所属、③連絡先（メールアドレスまたは電話番号）、④懇親会への参加の有無をお知らせ下さい。

（岡田直人）

第7回 若手研究者・院生情報交換会報告

『福祉研究・教育におけるジェンダーパースペクティブを問う』

2006.9.16@京都光華女子大学に参加して

当日は台風接近も懸念されるなか、関西福祉研究者のマハト（！）によって、台風の進路もそれ、日常語り合うことの少ない「福祉とジェンダー」をテーマに、51名（女性33・男性18）と、多くの参加者を得て開催されました。（懇親会は27名）

まず、光華チーム（石井祐理子・五味幸子・種橋征子氏）からアイスブレイク・ゲームとして「男らしさ、女らしさ（ステレオタイプ）」尺度（伊田広行『はじめて学ぶジェンダー論』2004）を用いて自分自身の中のジェンダーバランスを測るというワークショップが行われ、会場に女らしい男性や男らしい女性が多いことを確認しあい、「らしさの恣意性」を実感しました。

次は、『女性福祉とは何か—その必要性と提言—』（林千代編著2004）執筆の関西コンビのお二人からのレクチャーがありました。今井小の実先生（大阪体育大学）からは『社会福祉と女性史—“差異”も“平等”

も—』の発題で「女性史と社会福祉史の交差」について、与謝野晶子、平塚らいてう等による女性保護論争から解説し、「平等に対する運動と差異に対する運動」が並行して展開されてきたという総説を踏まえて、現在の「平等の名のもとに母性としての差異を無効化するかのときジェンダー・バックラッシュ」への危惧や、「差異か平等かという二元論」を超える新たな視点の必要性を学びました。加納恵子先生（京都光華女子大学）からは、はじめに「ワタシの更年期症候群—日常次元の福祉研究・教育生活の不定愁訴—」と称して、「ジェンダー・レンズ」を通して眺めた生活景色の腑に落ちなさを、たとえば「論理思考や知の体系というプロクルステスのベッドの強迫観念」から「女子大の建前と本音」に至るまで先生流のレトリックを駆使して日頃の問題意識を披露いただきました。そしてジェンダーという「めがね」による「可視化」や映像を見直す「再審・再構築・再定義」といった作業が、本来の福祉研究を豊富化し、今日的課題である「社会的排除と包摂」の現象学を読み解くことに貢献する可能性があること、さらに「民族」「階級」・・・といった他の「めがね」群とも通底した課題、たとえば、「主流化・包摂」の名の下に上から規格化されるパワーポリティクスを同定する研究体力を力説されました。

プログラムのオオトリはサプライズ企画として、『アカデミックママ右田紀久恵の部屋』が用意されていました。女性福祉研究・教育者の先達として、常に私たちの憧れであり目標であり続ける右田先生の歩んでこられた足跡を、加納・今井両先生によるインタビュー形式でたどる貴重なひと時となりました。先生の福祉研究の原点が新憲法であったこと、また民主主義への変わらぬ熱き想いなど拝聴し、「右田理論」ではなく「人間右田紀久恵」にじかに触れさせていただくことで、男女を問わず若手研究者たちは大いに触発され研究への勇気を頂きました。早速と実行委員会にアンコールの声寄せられていると聞きました。また、ノルウェーからの帰国早々に参加いただいた上掛利博先生（京都府立大学）からは最新女性政策事情などタイムリーな情報提供もありました。以上、とても有意義でございました。午後のひと時であったことを報告いたします。

（関西学院大学大学院後期博士課程3年川島ゆり子）

第8回 若手研究者・院生情報交換会報告

関西社会福祉学会が主催する第8回若手研究者・院生情報交換会は、2006年11月4日（土）に大阪府労働センター「エル・おおさか」にて、「地域福祉計画フレームから地域福祉を解説する」というテーマの下、関

西各地から30名余りの出席者を得て開催されました。今回はこのテーマの第一人者である関西学院大学の牧里毎治先生を発題者としてお招きし、まさに今日、多くの自治体において策定段階から実行段階へと移りつつある「地域福祉計画」をどう研究すべきかについて、先生の豊富な実践経験に基づいたご示唆を得る大変貴重な機会となりました。

午後2時に始まった今回の情報交換会では、牧里先生より1時間半にわたるご発題をいただいたあと、参加者から質疑応答が積極的に繰り広げられ、気が付けば終了予定時刻を30分もオーバーして午後4時半に閉会となりましたが、ここからもそれぞれの参加者の本テーマに対する関心の高さや研究意欲をうかがい知ることができます。もちろんそのすべてをこのレポートに盛り込むことはできませんので、以下に参加者を代表して、その概要と所感を簡単にまとめさせていただきます。

牧里先生からの報告では、本題の地域福祉計画研究の話に進む過程で、長きにわたるご自身の研究テーマを①事例研究、②調査研究、③レビュー研究、④解釈研究、⑤アクションリサーチの5期に区分した振り返りがあり、各時期に公表された代表的著作の一部を紐解きながら、そこに込められた問題意識や研究方法、創意工夫などをお聞きすることができました。例えば神戸市真野地区の事例研究では、ダンボール数箱に収集された膨大な資料から当事者の目線に立ってその思いを物語化し、リアリティやダイナミズムを追求したという話がありましたが、これは現在のナラティブモデルに通じる研究方法論であるとともに、事例研究と向き合う自分自身の姿勢を改めて考えさせられるものでした。

今後の地域福祉計画研究のトレンドという点では、住民参加の手法や策定組織の構成など策定プロセスのあり方とともに、その評価がいよいよ研究対象になるという指摘があり、報告者自身も計画策定に携わるアクションリサーチャー(?)の一人として、地域福祉の真価が問われる時期に入ったという印象を持ちました。地域の生活課題を踏まえて定められた個々の計画がどれだけ実現できるかは、地域の自治力を映し出す鏡として見られるかもしれません。しかしどの自治体も財政事情が厳しい中で計画自体が空転する可能性もあり、確かに厳しい時期に入ったのだといえます。ただ策定に携わった人ならば、実行性だけでは語れない計画の社会的意義があることは十分に承知されるはずであり、その意味でも計画の功罪を正当に評価するための研究は重要性を増すと思われます。

以上のような牧里先生のお話から、地域福祉計画の難しさや可能性の両面を理解することができましたが、我々若手としては、先生から受け取った刺激で研究へ

の思いを新たに、そうした困難を乗り越えて地域福祉の意義と役割をさらに明確にしようと感じる機会になったと思います。

(報告者:同志社大学大学院博士後期課程 竹川俊夫)

B会員会費納入のお願い

既に過去のニュースレターでもお知らせしてまいすように、前年度から日本社会福祉学会の関西部会員の方は自動的に関西社会福祉学会のメンバーとなり、会費は日本社会福祉学会からの還元金を当てることとなりました。(A会員)

一方、日本社会福祉学会の会員ではないが関西社会福祉学会の会員である方は、今までどおり年会費を2,000円とすることになりました。(B会員)

従って、B会員の方は本年度会費2,000円を納入いただくようにお願いします。

本ニュースレターを送付した封筒の宛名ラベル右下に「B」と印刷されている方がB会員です。万一、「B」と印刷されているものと印刷されていないものが2通届いている場合は、その方はA会員です。お手数ですが岡田(E-mail: okadan@osaka-ohtani.ac.jp)まで、ご一報下さい。

(岡田直人)

機関紙担当から

今年度2回目のニュースレターを発行することが出来ました。本号は、今年度大会の基調講演をお願いする平山先生から巻頭言を頂戴しました。是非、総会・大会へのご出席をご検討ください。

また、若手研究者・院生情報交換会も回数を重ねることができるようになりました。その報告や予告などスペースの関係で僅かですが、いろいろな情報を盛り込みました。ご覧下さい。 小山 隆

関西社会福祉学会ニュースレター

発行日 2006年12月15日

発行者 会長 岡本民夫

関西社会福祉学会事務局

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

大阪市立大学生活科学部社会福祉学研究室気付

電話 06-6605-2895 Fax 06-6605-2894